

追悼

故 前田 憲志 先生 ご略歴



昭和14年4月1日 三重県に生まれる
昭和40年3月 名古屋大学医学部卒業
昭和61年7月 日本透析療法学会評議員
昭和61年7月 日本透析療法学会理事
平成3年5月 名古屋大学医学部附属病院分院 内科教授
平成4年4月 名古屋大学医学部附属病院分院 院長
平成5年11月 社団法人日本透析医学会評議員
平成5年11月 社団法人日本透析医学会理事
平成8年4月 名古屋大学医学部附属病院 在宅管理医療部
教授
平成14年3月 名古屋大学名誉教授
平成14年4月 医療法人有心会理事長及び有心会大幸砂田
橋クリニック院長
令和8年3月21日 逝去（享年88（没年86歳））
平成16年6月17日 日本透析医学会名誉会員

前田憲志先生を偲んで

愛知クリニック
新里 高弘

前田憲志先生のご逝去の報に接し、言葉に尽くせぬ寂しさを覚えております。心より哀悼の意を表します。日本の透析医療の歩みを振り返るとき、先生のお名前を抜きに語ることはできません。その存在の大きさを、改めて痛感しております。

前田先生は、日本透析医学会の理事、統計調査委員長として長年にわたり日本の透析医療を牽引され、その統計調査を世界的水準へと高められました。日本の透析医療の実態を正確に把握し、それを世界に発信する基盤を築かれたことは、わが国の医療の信頼性を支えるうえで極めて重要な業績であったと考えます。

また、名古屋大学医学部教授として多くの人材を育てられ、退官後も医療法人有心会の理事長として約20年にわたり医療の現場に立ち続けられました。そのご功績の大きさは、いまさら私が述べるまでもありません。

私が先生に出会ったのは、26歳のとき、名古屋大学分院内科に入局した頃でした。36歳の先生はすでに国内外で高く評価されており、私にとってはまぶしいほど遠い存在でした。ECUMの開発をはじめとする業績を前に、私はただ、その背中を見上げることしかできませんでした。同時に、その背中の先にあるものが何であるのかも、当時の私にはまだ見えていませんでした。

当時、貧しかった私を先生はよく食事に誘って下さいました。そして、「日本の透析医療は世界に遅れてはならない」、「医師は患者の科学的代弁者であるべきだ」と静かに語られました。その言葉の意味を、若い私は十分に理解できてはいませんでした。しかし、その後の人生の中で、先生の言葉は繰り返し思い出され、そのたびに重みを増していきました。今振り返ると、それは単なる理念ではなく、先生ご自身が日々の実践

の中で体現されていたものであったのだと感じております。

先生の行動力を象徴する話を、後に企業の方から伺いました。1970年前後、日本の透析医療がまだ遅れていた時代、ちょうどニクソンショックに伴う繊維輸出自主規制の問題で、国内の繊維産業が大きく揺れていた頃でした。当時、日本の透析医療は機器の多くを海外に依存しており、必要な治療を十分に提供できるとは言いがたい状況にありました。そうした中で先生は「日本は自国でダイアライザーを作らなければならない」と考え、大手繊維メーカーの門前に立ち続け、重役に会うまで三日間、毎日八時間を費やされたというのです。その熱意が企業を動かし、日本のダイアライザー開発の礎となりました。先生にとって「考えること」と「動くこと」は常に一体であり、その信念は、状況がいかに困難であっても揺らぐことはなかったのだと思います。

また、患者さんと向き合う姿勢も、先生の本質を示していました。透析装置が限られていた時代、厳しい制限と過酷な治療の中で、先生は患者と同じ食事をとり、ともに走られました。ある患者さんが力尽きて倒れたとき、先生は「あなたを生かすために、多くの人が治療を受ける機会を失った。だからこそ生きてほしい」と語りかけられたそうです。そしてそのとき、先生ご自身が涙を流しておられたと聞きました。その話を聞いたとき、私は、先生の厳しさの奥にある深い覚悟と優しさを思いました。それは単なる指導ではなく、「命に向き合う覚悟」を患者と共有する行為であったのだと思います。そしてその覚悟こそが、先生の医療の根底にあったものではないかと、今になって感じております。

私にとって忘れがたいのは、若い頃の研究の記憶です。血液ポンプを間欠的に止めて圧を測定することで透析低血圧を予知できるのではないかと、未熟な発想ながら私は真剣に取り組んでいました。今振り返れば誤った方向の研究でしたが、当時の私はそれに没頭していました。何かをつかみたい一心で、周囲が見えなくなっていたのだと思います。

先生はその様子を何も言わず、ただ静かに見守っておられました。しかしある日、実験中の私の横に立たれ、こう言われました。

「君は納得するまで、この研究をやめないだろう。だが、世の中は速い。ならば、一緒にやろう。早く結論を出そう」

そしてその言葉どおり、先生はご自身の時間を割き、夜遅くまで私と一緒に実験をしてくださいました。実験室の灯りの下で、同じデータを見つめ、同じ手順を繰り返すその時間は、今思えば、言葉以上の指導であったように思います。上司が自ら手を動かし、若い医師のために同じ場所に立ち続ける——そのような姿を、私は他に知りません。

研究は結局、先生の見通しどおり成功には至りませんでした。しかし、あの時間の中で、私は研究の進め方だけでなく、医師として、そして人として何を大切にすべきかを学びました。あの夜の実験室の光景は、今でも私の中に静かに残っています。そしてそれは、迷うとき、立ち止まるとき、私の中で一つの指針となっています。

私は二年前、医療法人有心会の理事長職を先生より引き継ぎました。引き継いだものの重さを思うたびに、先生の背中が大きさを改めて感じています。先生が示された道は決して平坦なものではありませんが、その歩みの意味は、これからも変わることはないと感じています。そして、その道をそれぞれの立場で歩み続けることこそが、私たちに課せられた役割なのだと感じております。

前田先生の言葉、行動、そして生き方は、私の中に今も生き続けています。そしてそれは、私だけではなく、多くの弟子たちの中で受け継がれ、それぞれの現場で新たな形となって生きていくのだと思います。先生の志は、これからも静かに、しかし確かに、日本の透析医療の中に流れ続けていくことでしょう。

先生、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和8年4月11日